

(10) ドロバチモドキ亜科 (Nyssoninae), II

常 木 勝 次

A Guide to the Study of the Japanese Hymenoptera (23)

(10) Nyssoninae of Japan and Korea (II)

By K. Tsuneki

生物研究 (福井) 第Ⅸ巻 第3・4号 44~48頁別刷

Reprinted from The Life Study (Fukui), Vol. IX, Nos. 3-4, pp. 44-48

December 1965

蜂類研究手引 (23)

(10) ドロバチモドキ亜科 (Nyssoninae), II

常木 勝次

A Guide to the Study of the Japanese Hymenoptera (23)

(10) Nyssoninae of Japan and Korea (II)

By K. Tsuneki

各属についての解説

(1) *Bembix*

Fabre 昆虫記第1巻の16章に *Bembex* という蜂が登場することを、読者はご存じと思う。あのころはもとより、比較的近年まで、ハナダカバチ属に対して、*Bembex* Fabricius, 1777 が確かに用いられていたのである。ところが分類学者が詮索したところ、Fabricius は *Bembex* を使った年より2年前の、1775年に著わした本の中で *Bembix*, その本のもっと後のページに *Bembyx*, という属名を使っていることが明らかになった。この3つの属名の中で、*Bembix* が先取権をもつということになるので、その後 *Bembix* が一般に用いられるようになったわけである。

またポーランドの Minkiewicz (1934) はこの属を *Bembex* と *Epibembex* とに分けたが、もしも彼に従うとすれば、日本のものは後者に入る。しかし欧州の学者でこの分類を採用する人はなく、米国の学者だけが亜属として採用している。

Bembix 属は日本から3種の記録があるが、1種は検索表に示したように、*niponica* Sm. のシノニムであり、残る1種 *humida* という黒い種は、その存在が疑わしいもので、もし日本にそんな種がおるとすれば、小笠原諸島以外にはおきそうなところはない。小笠原は調査不十分だから、一応この疑問種も検索表の中に収めておいた。

なお、朝鮮、北支、中支、蒙古に分布することが知られている *B. picticollis* F. Morawitz という種は、*niponica* と重要な点において少しも違ってはいない。それゆえ私はこれを *niponica* の亜種として取り扱うことにした。系統的にはこの関係は逆であろう。以前にも *picticollis* は Maede-Walde (1911) によって *niponica*! と同定されたことがあるが、それは決して誤りではなかったのである。

(2) *Stizus*

美しい脚をもつ、という意味の種小名をもった日本では唯一の種が、この属に入るが、同属の種は世界的にも数が少ない。ハナダカバチモドキなどという長たらしく、いやな和名を与えられていることは残念である。*Stizus* の元義は斑点のあるものの意で、腹部の模様から由来するらしい。近年まで、この属には次の *Bembecinus* が包括されていたため、古く *Stizus* の名で示されていたもの大多数は、実は *Bembecinus* である。キアシハナダカバチモドキ! は日本では個体数の少ない種で、主として中国地方や九州北部に産するが、私は四国の宇和島で1♀を採集した。最近石川県羽咋(ハクイ)で富樫一次氏が1♀を、福井県敦賀付近で羽田義任氏がやはり1♀を採集し、本種が日本海に沿ってかなり北上していることが明らかになった。

この種は朝鮮でも決して普通種ではないが、私は京城飛行場付近でその colony を発見したために、生態を調べるとともに、相当数の個体を採集することができた。なお、私の経験によると、北支北京の天壇ではこの種はときどき姿を見せるくらいであったが、内蒙古の草原には、相当繁栄しているらしく、花上にその姿を見出すことは、決して困難ではなかった。本種は地中にハナダカバチの巣に似た坑をほり、小形のバツタの類を蓄える。(常木, 1942, 43, 65)。

(3) *Bembecinus*

日本および台湾から *Stizus* という属名のもとに記載された *Bembecinus* は、合計10種になる。記載はい

ずれも色彩斑紋を中心にした、すこぶる不十分なものであるが、現在では Types を検することは大部分が不可能なので、その記載だけを手がかりにして推定したところによると、中の3種は欧州に普通な *tridens* という種に当るらしく、6種は、やはり欧州に多い *hungaricus* に当り、残りの1種は New Guinea のものと同じらしいことがわかった。最近私は日本・朝鮮各地で採集した多数の標本について、従来種の特徴とされているような性質のいくつかについて、その変異を調べてみたところ、それらがかなり大幅に変異することがわかった (Etizenia, No.8)。この結果から判断すると、本属の種は世界的に大いに整理される余地があるようである。

なお、日本産種の中で、小笠原島から知られている黒い *Bembecinus* は、非常に興味がある。標本を見ないことには確実な種名をあてることはできないが、一応報告された種名を用いておくことにした。*anthracinus* の原記載から想像すると、この種は *hungaricus* の黒化型と考えられぬこともないが、すべての解決は標本が手に入ってからのことである。

satsumanus という種を私は *tridens* のシノニムとして扱ったが、鹿児島付近に頭楯の真黒な *Bembecinus* が果しているかどうか、私は少し疑問に思う。佐多岬で私は多数の *Bembecinus* を採ったが、みな *hungaricus* ばかりであった。産地の鹿児島は地名の誤記ではないかと思われるのである。なお、その標本は、特異の斑紋から考えると、一つの亜種にしてもよいようである。

(4) *Nysson*

日本産種は2種で、大きい方の *spinosus malaisei* の方が、小さい方の *trimaculatus japonicus* より少ない。前者は独立種として記載されたものであるが、私は欧州種の亜種として扱った。両者には種を分けるほどの違いはない。

Nysson の類の習性は、欧亚大陸ではまだよく分っていない。Ferton が、このある種 (*dimidiatus*) がアワフキバチの1種の巣に入りこんだのを記録していることから、寄生性と見られているが、確かなことはまだ調べられていないのである。ただし、北米のものには穴蜂科や蜜蜂科の巣に寄生するものがある。

白山連峯の低山帯にかなり多く、私の手許に他地方のものも含めて、*s. m.* の方7♀3♂、*t. j.* の方14♀19♂の標本がある。

(5) *Nippononysson*

この属は世界に2種で、1は比島産である。日本産の種は本州南部、九州および奄美大島に産することが知られていたが、私は北海道定山渓で7♀8♂を採集している。いずれも8月上旬で、小樽内川沿いの草やぶで得たものである。日本種の習性は未知である。

(6) *Gorytes*

Gorytes という属名は、古来その内容がさまざまに変わっているので、その概要を知っておく方がよい。最も広い意味に用いられた場合は、現在の *Gorytini* 族と同じ内容を持ち、従って *Argogorytes* から狭義の *Gorytes* までの全部を含むことになる。最近までの分類形式が広く用いられており、日本の図鑑類も多くはこれに従っている。この場合、古くは亜属を分けることもしなかったが、近くは本文の *Gorytini* の属として掲げたものを亜属として採用している。次に *Gorytes* を最も狭い意味に用いたものは、本文のものがその例である。ここで使われる *Gorytes* は、これまで *Hoplisus* といわれたものである。この広狭両義の中間的な意味に *Gorytes* を用いているのは、Suisse の Beaumont で、彼の *Gorytes* は、本文の *Gorytes (s. str.)*・*Hoplisoides*・*Dienoplus*・*Lestiphorus* をはじめ、他に *Psammaecius*・*Oryttus* という2つを加え、それらを亜属として含めている。彼の *Gorytes* 属に対立する *Gorytini* 中の他の属は、*Ammatomus*・*Argogorytes*・*Olga*・*Sphēcus* および *Kohlia* である。日本には、これらの中で *Argogorytes* 以外は産しない。彼の分類によると、私の用いる *Gorytes* (米国学者と同じ) は *Gorytes (Gorytes)* で現わされる。これは狭義の *Gorytes* という意味で、私の使う *Gorytes* を *Gorytes (s. str.)* として示すことがあるが、この場合は *Gorytes (Gorytes)* と対象とするものは全く同じであるが、分類学的には見解が違い、括弧内の

Gorytes だけを指すことになる。(多くの場合に、この両者は同義に用いられるが、このような場合があるから、*Gorytes* (*Gorytes*) を *Gorytes* (*s. str.*) 式に現わすことは避けた方がよい。)

以上のようなわけであるから、genus *Gorytes* と言われただけでは、その内容がわかりかねるものであることを、この方面に興味をもつ人は、知っておくべきである。

(7) *Dienoplus*

この属名は、少し前の分類書では *Harpactus*, *Arpactus*, *Harpactes*, *Arpactes* などという属名、または亜属名で表わされていた。ところが、これらの名はいろいろと異った内容をもったものに当てられていたため、それらを整理すると、命名規約上、*Gorytini* の 1 group に当てることができなくなってしまい、結局多くの synonyms の中で最優先権のある *Dienoplus* Fox が用いられることとなったのである。

日本では岩田博士が、その 1 種の生態を調べ、それを *Gorytes* (*Harpactus*) *laevis* (Lepelletier) の名の下に発表した(昆虫11)。しかし、このものは、併記された色彩から *laevis* ではなく、欧州種 *tumidus* の 1 亜種であることは明らかである。この種は河原に棲息し、造巣する。私も九頭竜川発原の河原で発見し数回にわたって 2 ♀ 3 ♂ を採集した。しかし、巣を発見することはできなかった。その後発原の河原は増水で荒廃し、再びこの種と出会うことはできなくなったが、どこかあの付近の河原(丈の低い草がかなり繁ったところ)に棲息していることと思う。この種、*tumidus japonensis* Tsuneki は、日本では確かに珍品の美麗種である。

以上のようなわけで、*laevis* が日本におくことは大変疑わしいのであるが、*laevis* は北支や内蒙古では珍しくなく、私は蒙古のある土崖に作られた巣を発掘調査したこともある。

(8) *Lestiphorus*

この属のものは、腹部第 1 節が徳利形になっている点で、*Gorytini* の他の属と大変違った感じの蜂で、一見したところでは、むしろ *Mellinus* に近い。しかし翅に黒斑があるから、少し注意すれば区別は容易である。少ない蜂で、私が日本の *Gorytini* をまとめたとき、私は日光産 2 ♀、白山産 1 ♀ しかもっていなかった。その後福井県小池で 1 ♀ を捕え、また白山麓で 1 ♂ を捕えた。北方系のものと見られる。

(9) *Argogorytes*

Gorytini の中では大形の蜂で、オオアワフキバチの方は割合めずらしくない。しかし、その ♂ はなかなか得られぬ。ニッポンの方は比較的少ない。両者は外見上非常によく似ているが、♀ の尾域を見れば、容易に区別できる。この種も ♂ は採集困難である。

(10) *Alysson*

この属の中に *Didineis* Wesmael, 1851 を含めることもある (Beaumont, 1954)。これは昔の形にかえった分類法であるが、*Alysson* と *Didineis* とをごっちゃにせず、両者を亜属としてはっきり区別している点が進んでいる。このような分類によると、われわれの *Alysson* は狭義の *Alysson* となり *Alysson* (*Alysson*) をもって表わされることになる。日本・朝鮮からは、まだ *Didineis* は知られていないから、ここでは全く問題はない。

この属の蜂は前翅に黒斑があり、腹部第 2 節に 2 黄紋がある点は *Lestiphorus* と似ているが、腹部は普通の無柄形であることと、体とくに腹部に光沢があることで区別できる。一方、本属の蜂の ♀ では、頭楯前縁に 3 歯を具える点で、*Mellinus* と同様である。♂ も彼と同じく前縁直切状か、ときに 1 歯をそなえる。

Alysson 属は日本では、ただ 1 種 *cameroni* で代表されるものと、長いこと思われていた。しかし、私の手許には検索表に示したような 3 種類がそろっている。この中の *pertheesi* Gorski という種は、胸部に赤色部のある美しい蜂で、データは次のようである：

(1 ♀, Foot of Mt. Kogashi, Tochigi Pref., 4. X. 1936, leg. K. Tsuneki)。

古賀志山というのは東京から宇都宮経由で日光に向うとき、鹿沼をすぎるところ車窓の右手に見えるギザギザの稜線をもった石灰岩の山である。その東からの登山路に沿ったソバ畑で、ちょうどその花盛りのときで

あったが、私はこの珍品を捕えたのである。蝶学者がフトオアゲハを捕ったら、おそらく同じような感激にひたるだろうと思われるくらいに、若い私は狂喜した。だから今でもその当時のことを、ありありと思い出せるのである。私はもちろん追加標本を得たいものと、登山予定を変更して、ずい分ねばって付近のソバ畑を広く捜したけれども、それ以上発見することはできなかった。また、その後も毎年同じところに採集に行ったが、やはり他の個体を発見することはできなかったのである。10月と言えば、蜂屋さんは、もう余り採集に出ない人が多いようだが、北陸地方などでは、山手にはソバ畑はふんだんにあることだし、そのころは *Tachytes* など造巣活動をしているから、これから注意されるようすすめておこう。

もう1種の *ratzeburgi* Dahlbom* の方は、採集時のことは何も覚えていない。この種の♀は *cameroni* と全くよく似ていて、propodeumの心形域の形をみるまでは区別できない。尤も、♂は顔に黄色部が多く、その触角下面が黄色いという特徴があるのだが、私の日本産標本は♀だから、顕微鏡下で、はじめて発見したわけである。

1 ♀, Ichinose, Mt. Haku, 29. VII. 1956, leg. K. Tsuneki.

1 ♂, Nansetsu-rei, N. Korea, 23. VII. 1943, K. Tsuneki leg.

Alysson はおそくまで活動する。鹿児島で10月中旬に昆虫学会があったとき、農学部の実験園にかなりおったことを覚えている。

なお *cameroni* について、私には次のような思い出がある。1937年の7月下旬、私は奥秩父三峯山から雲取山に向う途中、路上でこの蜂の一大コロニーを発見した。中津峠から山をずっと登りつづけてきた後で、時間もすでに遅かったが、私はその複雑な分岐構造をもつ巣を7つ8つと掘った。このため雲取の山小屋に着くためには、懐中電灯を頼りに真暗な山道を2時間も歩かなければならなかった。この後2日ほど山を歩いて家へ帰ってみると、日支事変の動員令が私を待っていた。三峯で採集したアルマンモアアカアナバチの巣を調べると、いろいろな観察記録を整理することも、もちろんできなかった。私はまさに取るものも取りあえずに応召したが、広島で船に乗りこむ前に1冊のノートを買ってこむことを忘れなかった。そして玄海灘の波にゆられながら、引きちぎって持ってきた野帳の図をたよりに、頭の中のイメージが薄れぬうちにこの蜂の生態記事を整理したのであった。死ぬかも知れない、という思いは、当時いつも頭から消えることはなかったが、私はそういうことを超越した人のように行動していたのである。このことは北支や蒙古で蜂を調べていたときでも、全く同様であった。

(11) *Mellinus*

この属も北方系の蜂で、7~8月北海道では最も普通なものである。本州平地では9月から10月にかけて栽培ウドの花などによく集まる。山地では大抵8月にとれる。造巣地では孤独に暮しているものもあるが、コロニーを作るのが普通である。

生 態 の 概 要

Nyssoninae の蜂はどれもみな地中造巣性である。*Nysson* と *Nippononysson* は寄生性であることが想像されるけれども、その他のものでは *Bembicini* が双翅類(外国の属の中には異翅半翅類をとるもの、*Mincrobembex* のように何でもアリのように集めるものなどもある)、*Stizini* の *Stizus* は直翅目、*Bembecinus* は同翅類—ヨコバイ・ウンカの類—を狩る。*Gorytini* の諸属は大部分が同翅類のアワキムシを狩るが、ヨコバイ類をとるものもある。米国の有名な *Sphecius* という属のものは、同じく同翅類ではあるが、セミを捕えることで知られている。*Alysson* も同翅目のヨコバイ類、*Mellinus* は小形のハエを捕える。

これらの中でおもしろいことは、*Gorytes* (s. str.) の中にアワフキの幼虫を捕えているものがあることである。アワフキの幼虫は、樹液を吸い出し、その一部に空気をまぜて、その名に示されているようにアワを

* 本号所載の採集記に出ているように、田塾正さんは今夏日光金精峠で、この種の♂を多数採集された。

作って、その中にかくれているのである。ハチがどのようにして、アワの中から獲物をとり出すのか、興味深い問題である。

次に生態に関する日本関係の主要な文献について一言すると、*Bembix* については比較的多くの報文があるが、これは私の福井大紀要, II (1958) の論文の末尾に整理されている。*Stizus* には私が書いたもの (1938, むし; 1965, *Etizenia*) があり、*Bembecinus* には岩田 (1936, 昆虫) のものがある。*Dienoplus* については岩田 (1937, 昆虫), *Argogorytes* については私 (本誌本号), *Alysson* については榊田 (1932, 福岡博雑), *Mellinus* については丸山 (1948, むし) がそれぞれ書いている。この他に短報は若干見られるが、余り多くはない。

なお安松 (1939, 原色日本昆虫図説中の蜂類) および安松 (1944, 日本生物誌, 昆虫の中の蜂類) には参考とすべき記事が多いことを付記しておく。

訂 正

前号掲載の *Nyssoninae* の検索表中, 下記の誤りがあることが発見されましたので, その部を訂正しておいて下さい。

P. 32, 検索番号36の第1行末尾に“上唇は黄”とあるのを黒とする。

同ページ, 36の一の第1行に“上唇は黒”とあるのを黄とする。

E R R A T A

In the key to the genera and species of *Nyssoninae* published in the previous Numbers :

Place	Error	Correct	Related species
P. 32, key No. 36, line 4	labrum yellow	labrum black	<i>G. eous</i> Gussak.
P. 32, key No. 36 -, line 2	labrum black	labrum yellow	<i>G. takeuchii</i> Tsun.